女性の名前の変遷から見る本土と沖縄の意識差

加藤　麻美

１．はじめに

沖縄には命名に関する独特の習慣が存在する。名前を継承するということが非常に重要視されており、継承方法は大きく２つに分かれる。一つは童名（ワラビナー）を継承する方法である。これについて上野（1999）は、「沖縄社会の伝統的名前である童子名は、各集落によってほぼ男女別にストックされて、子供にはそのストックの中から命名されてきた」（上野 1999:11）と述べている。そしてもう一つは、祖名継承法（上野 1999）である。これは男性の名前の始まりの一字を父親と同じ文字を使用する方法で、男性は家を継ぐ存在として強く意識されていることが窺える。先に述べた童名は、女性にとっては正式な名前となる。しかし男性にとってはそうならないため、男性は成人後、祖名継承法に従った名前を名乗ることになる。つまり、男性は祖名継承法に従った名前、女性は童名をそれぞれ名乗ることで名前を継承する、という本土には存在しない独特の伝統的習慣が沖縄には存在するのである。

だが、現在、これらの伝統的習慣による名前は減少し、本土的な名前が増加しているという。それは事実なのだろうか。もし事実であるとすれば、そこから沖縄の人々の命名に対する意識の移り変わりを読み取ることができる。また、上野（1999）が、人間の名前は社会構造と関連していると述べているように、本土の内部でも命名に対する意識や人名の変遷は地域や階層により違いがある。以上を踏まえ、本稿では命名と社会構造が関わりあうことを想定し、本土の中の中央と地方および本土と沖縄を対比的に捉え、命名の変遷の比較を試みる。なお、この場合の「中央」とは、文化的な意味での中心地と規定しておく。

本土の中央と地方の命名の変遷を比較した先行研究に、寿岳・樺島（1958）がある。そこでは、中央である京都と東京に対し、地方として滋賀と兵庫が取り上げられているが、本稿では、本土の中の地方として、秋田を分析対象とする。

また、本土と沖縄の比較という点において、経年的な変遷では女性の名前に特徴が見られたため、本稿では女性の名前の変遷に絞って話を進めることとする。本土の中の中央と地方、そして沖縄の女性の名前の変遷を分析することで、命名に対する意識の違いやそれぞれの意識の移り変わり、さらにその背景を明らかにしていきたい。

２．先行研究

２.１　本土の女性の名前の特徴

本土の女性の名前の特徴について調査をしている本田（2005）がある。それによると、女性の名前は大正初期、カタカナやひらがな表記のものが多い。続く大正中期

には「子」がつく名前が増加し始めるが、それは昭和中期に入ると減少し始め、昭和後期には名前ランキングの上位から消える。そして平成時代になると、身近な自然の植物のイメージを感じさせる名前が多くなるとのことである。

そもそもなぜ女性の名前はカタカナ・ひらがな表記から始まったのだろうか。寿岳（1979）は、漢字は「支配者の文字」であり、「当然男と女の対比では、それが表のことばであるがために、女には表立ってのタブーであった。しかし、ごく身分の高い女だけには漢字の名を与えた」と述べている（寿岳 1979:48）。また、漢字の名を命名するのは識字階級の人々であり、江戸時代になると、識字階級の増加と武士階級の確立により、漢字名は増加したとしている。一方、「江戸時代は、士農工商の身分制度が確立した時代であり、それだけに名前というものも身分制度確立のために大きく働いたに違いない。逆には、武士であることを示すためにも漢字を採用するということもあったのではなかろうか」のように述べており、漢字の名前が高いステイタスを持つものと意識されていたことが窺われる。したがって、明治時代になって「江戸時代にはみられないスピードでやはり女の名前の漢字化は確実に進行した」のは、「女の歴史のどこかの部分の開放が始まった」現象と解釈される（寿岳 1979:52）。つまり、近世までは一般庶民の女性に漢字の名前をつけることは一般的ではなく、明治期に入り女性が漢字を使用することが許されて以降、格式の高い名前への志向が高まり、女性の名前に漢字の使用が広まったと考えられる。

次に、女性の名前の末尾に見られる「子」について、阪倉・寿岳・樺島（1960）は、次のように述べている。

> 昔の高貴な家柄の女性で、権力者の妻となり、母となるような女性は、「子」がつく名前を持っているのが普通でした。（中略）したがって、「子」がつく名前はごく古くからある名前の型でしたが、一般の女性の手がとどかない高嶺の花でもあったわけです。（中略）子がつく名前は江戸時代の人にも少しは使われていたらしいのですが、明治以後になってはじめてごく普通に、女性の名前として使われるようになりました（阪倉・寿岳・樺島 1960:26）。

要するに、ある時期まで「子」がつく名前は特定の階級の女性のみに見られる特権的な名前であったのに対し、明治以後、女性が漢字を使用することを許した後、「子」の特権的な性格が徐々に崩れていったのである。

ここで最も高貴な家柄の女性である天皇の女性の名前をたどってみる。『纂輯御系図』（1878）や『群書類従第四輯』（1893）、『国史大辞典』（1984）、『皇后四代―明治から平成までー』（2002）などには、皇室関係の系譜が記載されている。これらを見ると、天皇家の女性は今日にいたるまで全員一括して漢字名前であることがわかる。「子」の使用は第 42 代文武天皇（大化元年即位）の皇后、藤原宮子皇后（神亀元年立后）に初めて見られ、以降、天皇家の女性は「子」がつく漢字名前が続いている。以上により漢字の名前と、「子」のつく名前は高貴な家柄の女性と結びついているということがわかる。

次に仮名表記の名前について述べる。現在はひらがな表記はともかくカタカナ表記の名前というのはあまり一般的ではない。しかし、先に本田（2005）で見たように大正時代はカタカナ・ひらがな表記の名前も多かった。これはどういうことなのだろうか。現在、小学校一年生は国語の時間にひらがなを最初に習い、一学期の終わりから二学期の初めにかけてカタカナを学習する。しかし、明治から昭和にかけて小学校一年生に読み書きの指導をする際に、カタカナから指導を始めていた時期があった。明治 36（1903）年、小学校では国の定めた教科書「国定教科書」を使うことが決められ、翌年から使われ始めた。一番最初の国定教科書は『尋常小学読本』で、これは現在の国語にあたるものである。巻一が「イ・エ・ス・シ」から始まっていたので、「イエスシ読本」と呼ばれた。ちなみに東京書籍（1959）によれば、小学校の教科書にひらがな表記が現れるのは昭和 16（1941）年から昭和 23（1948）年の間だと考えられる。また同時期、法律の文書はカタカナと漢字で記されていた。つまり、明治から昭和にかけて一般的な庶民の用いる文字としてカタカナが浸透していた時期があり、そのためその時期の女性の名前にカタカナ表記のものが多く見られるというわけである。

２.２　沖縄の女性の名前の特徴

１で述べた通り、沖縄の女性は各集落ごとにストックされた童名を継承してきた。ストックされた童名に関しては、沖縄の女性の名前には、「ウシ、カマ、ナベ、カマド、ツル、カメ、マツ、ウトといったものが比較的多く見られる」（寿岳 1979:132-133）ことから、これらの名前が該当すると考えられる。

ツル、カメ、マツといった名前は、縁起のいいものとして本土にもその名を持つ人が存在するが、ウシ、カマ、ナベ、カマド、ウトは、いずれも本土ではなじみのない名前である。

朝岡（1993）によると、沖縄ではカマドは「火の神」とされている。また、昔、沖縄では、カマとカマド、カマとナベがそれぞれ同じような意味合いを持っていたという。つまり、カマドが火の神であることから、それに類似するカマやナベも火の神と結びつき、宗教的にあがめられる存在になったのではないかと推測することができる。また、ウトに関しては、寿岳（1979）が、「祖先の霊に線香を上げて合掌することを「ウートートー」等ということがあり、そこから出たものとも考えられる」（寿岳 1979:133）と述べている。以上のことから、沖縄特有の女性の名前は、宗教的な意味合いを含むものが多いと考えられる。

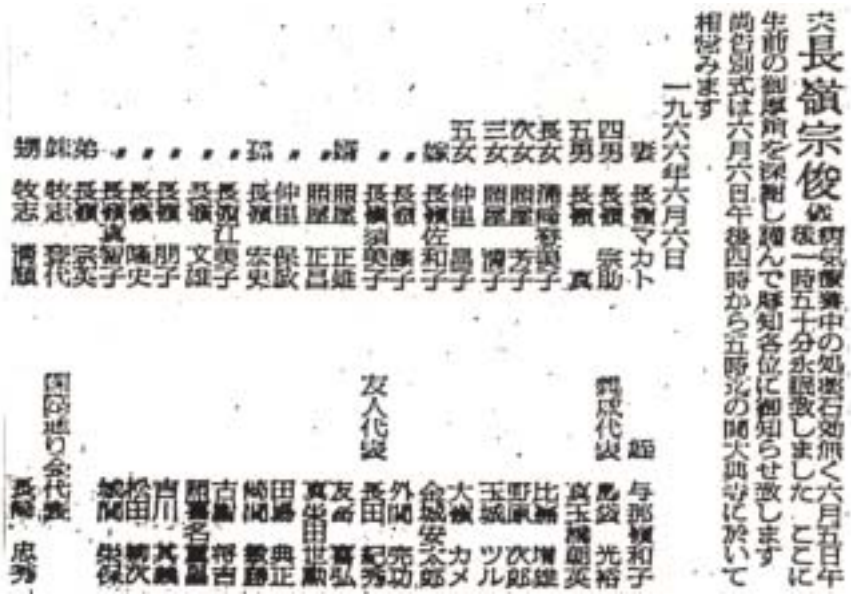
このように沖縄には命名に関する独特の習慣が存在し、本土には見られないような名前も存在する。しかし、現在、沖縄ではこうした名前が減少し、本土的な名前が増加しているという。そこで、沖縄の女性の名前が本土的に変化し始めた時期・理由・背景を探るとともに、命名に関する沖縄の伝統的習慣がどのようになったのか、ということについて調査し、考察していきたいと考える。

３．調査の概要

３.１　沖縄の女性の名前に関するデータ

平成 18（2006）年９月 20 日から 22 日に、沖縄の那覇市内で調査を行った。収集したものは以下の通りである。

まず、那覇市立城西小学校の卒業台帳（昭和 24（1949）年度卒業～平成 17（2005）年度卒業のもの）から児童の名前を１年おきに１クラス分（40～50 名程度）収集した。ただし、児童の生年月日を考慮し、年齢が周囲の児童と異なる者は対象外とした。分析対象となる那覇市立城西小学校は、明治 19（1886）年に首里小学校としての創立し、現在に至るまで首里城内部に所在し続けている。錦城町、山川町、桃原町、当蔵町、汀良町を学区（沖縄では「校区」）とし、石畳町など多くの文化遺産がある、古都の歴史・文化が薫る町である。古くは士族階級（上流階級）の人々が住む町で、琉球時代以来の「都」の位置していた地域である。次に、『沖縄タイムス』の訃報欄（1966 年６月、1976 年６月、1986 年６月分）を収集した。沖縄の新聞の訃報欄には一族の名前が掲載される（図１参照）。このデータからは明治初期から昭和初期に生まれた人の名前と家族内での継承の方法を知ることが可能になる。


六長嶺宗俊氏葬儀

一九六六年六月六日

図１　『沖縄タイムス』訃報欄　（1966 年 6 月 6 日）

３.２　本土（秋田）の女性の名前に関するデータ

秋田（秋田市以外）の７つの小学校（増田町立西成瀬小学校、合川町立合川北小学校、鷹巣町立南小学校、皆瀬町立生内小学校、千畑村立千屋小学校、十文字第一小学校、東由利町立八塩小学校）の卒業者名簿、同窓会名簿（昭和 24（1949）年度卒業～平成 17（2005）年度卒業のもの）を収集した。こちらは１年おきに全クラス分を収集した。いずれの学校も児童数が少なく、市の中心部から離れた周辺地域である。

次に、『秋田魁新報』の「赤ちゃんの名前募集コーナー」の欄（1985 年 6 月、1986 年 6 月、1988 年 6 月、1990 年 6 月、1992 年 6 月分）を収集した。これは、産婦人科が新生児の名前を新聞に掲載するかどうか両親の希望を聞き、希望があった新生児の名前が載るという仕組みになっている。このため、掲載される新生児の範囲は秋田県内全域にわたる。

以上の資料により、収集したデータ総数は、表１のようになる。

表1　データ総数（秋田）

生年	西成瀬	合川北	鷹巣町立南	生保内	千屋	十文字	八塩	魁新報	計
1935	36	34	26	3	106	68			273
1937	31	28	18	3	115	66			261
1939	25	19	20	6	78	69			217
1941	36	36	21	4	95	53			245
1943	36	28	18	6	75	71			234
1945	12	24	18	6	83	57			200
1947	12	31	19	11	101	67			241
1949	32	30	20	9	91	94			276
1951	27	35	22	12	71	71			238
1953	22	25	26	11	72	67			223
1955	16	21	11	10	74	67			199
1957	17	18	29	2	59	58			183
1959	12	16	31	1	45	58			163
1961	10	12	24	3	46	51			146
1963	11	13	16	3	43	51			137
1965	9	10	7	0	40	57			123
1967	8	8	18	2	44	93			173
1969	5	7	14	5	44	58	14		147
1971	8	15	11	4	27		12		77
1973	9	6	13	0	40		12		80
1975	7	13	18	2			10		50
1977	9	17	14	2			10		52
1979	8	19	12	2			11		52
1981	8	11	13	1			11		44
1983	8	5	16						29
1985	8	9	14					79	110
1986	7	10						105	122
1988	4							101	105
1990	5							125	130
1992	2							124	126
計	440	500	469	108	1349	1176	80	534	4656

３.３　本土（東京、京都、滋賀、兵庫）の女性の名前に関するデータ

寿岳・樺島（1958）は、東京、京都、滋賀の女学校と兵庫の小学校の卒業生の名前を調査し、女性の名前の型について研究を行っている。東京・京都を中央、滋賀・兵庫を地方として捉えて分析している。調査対象となった学校は以下の通りである。

１．東京　東京都立第一高女（現白鴎高校）

２．京都　京都府立第一高女（現鴨沂高校）

３．滋賀　日野高女

４．兵庫　好徳小学校（寿岳（1958）のデータを女学校卒業の年に変換して使用）

表２、３は、収集したデータから「子」がつく名前に注目し、地域別にデータ数の変遷を見たものである。

表2　「子」がつく名前（東京、京都、滋賀）

	東京	京都	滋賀	計
明治42～大正2	6	26		32
大正3～7	23	37	6	66
大正8～12	37	46	9	92
大正13～昭和3	48	54	15	117
昭和4～8	48	61	25	134
昭和9～13	65	67	41	173
昭和14～18	72	71	67	210
計	299	362	163	824

表3　「子」がつく名前（兵庫）

	兵庫
明治41～45	1
大正2～6	3
大正7～11	7
大正12～昭和2	18
昭和3～7	32
昭和8～12	41
昭和13～17	59
計	161

この調査では明治 42（1909）年度卒業～昭和14(1939)年度卒業者を対象としている。ただし、この時代は現在のように教育制度が６・３・３制となっていない。文部科学省「学制百年史　第一編　第二章　第三節　二」によれば、高等女学校は、修業年限４年の尋常小学校を卒業した後、６年間就学することと規定されているが、修業年限に関して３年まで短縮することができるとされている。以上のことを考慮した上で、図２の横軸で示された卒業年度から仮に 14 年ずつ引き、それを生年として本稿では考察を行うこととする。また、このデータは増加傾向が見られる明治 40 年から昭和 16 年までの期間を５年毎にまとめて、○○コ型の百分率増加を見ているという点にも注意しておきたい。これを用いて本土の中央である東京・京都について分析するとともに、秋田を本土の中の地方として考えるときに滋賀・兵庫を参考としたいと考える。

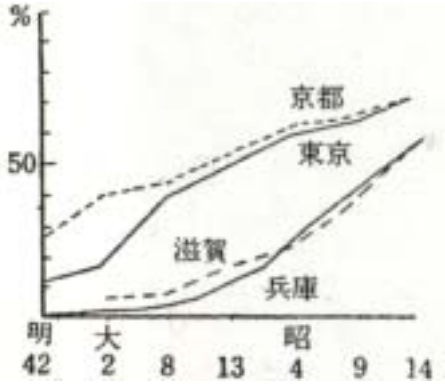


図2　○○子型なまえの年代的変化
～東京、京都、滋賀、兵庫～
(阪倉・寿岳・樺島 1960:28)

４．仮名表記の名前に見られる地域性

沖縄と秋田の女性の名前を比較するにあたり、まず、仮名表記の名前について見ていきたい。今回収集したデータの中から、仮名を含む名前を表４～７に挙げる。なお、表に挙げた名前は各年ごとの「異なり」のデータである。

古い時期のデータを見ると、沖縄では仮名表記のものが少ない一方、秋田では多いということが読み取れる。さらに、1951 年までの秋田の女性の名前の中には地域性を感じさせるものが存在する。これには秋田方言が大きく関わっている。以下、その名前を類別して挙げる（(　) 内は予想される本来の表記)。

(1)「イ」と「エ」の混同：エサ子（イサ子)、キイ子（キエ子)、タイ（タエ)、えさ（いさ）

(2)「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」の混同：カチ（カツ)、カチ子（カツ子)、タチ（タツ)、チタ子（ツタ子)、ツジ子（チズ子)、ナチ子（ナツ子)、ハチヱ（ハツヱ)、マチヱ（マツヱ)、いち子（いつ子)、たち子（たつ子）

(3) (1)＋(2)：イチ子（エツ子)、ツイ子（チエ子）

(4) 長音の無表記：エコ（エイコ)、リ子（リイ子）

まず(1)～(3)に関してだが、秋田方言には「イ」と「エ」、「シ」と「ス」、「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」をそれぞれ混同しやすいという発音上の特徴が存在する。このことから、「エサ子」と書かれた名前は実際には「イサ子」、「ナチ子」は「ナツ子」、「たち子」は「たつ子」のことを表していると考えられる。次に(4)についてであるが、秋田方言では長音が一拍分の長さにはならず、短く発音されるという特徴があり、それを反映した名前だと考えられる。

以上の他に、「とむ子」と「シュヱ子」という名前が見られた。「とみ子」は「ミ」と「ム」を混同した結果生じた名前であり、実際は「とみ子」だと考えられる。「ミ」と「ム」は実際には区別されるのだが、発音が非常に近いためこのようなことが起こったのだろう。次に「シュヱ子」について述べる。秋田方言では「ス」と「シュ」を区別するのだが、東北方言では「ス」を「シュ」と発音することがあるため、その傾向がここでは表れているのだろう。わざわざ１文字の「ス」ではなくあえて２文字の「シュ」を使用したのは表記に懲りたかったという理由からなのかもしれない。「シュ」の後にワ行の「ヱ」を使用していることからも、その傾向がうかがえる。

このように方言の特徴がそのまま名前の表記に投影され、地域性が生じているのである。ただし 1953 年以降、こういった名前は見られなくなる。これは漢字名前の増加により、仮名表記の名前が減少したことが一つの原因だと考えられる。

なお、こうした地域性のある名前は他の地域にも見られる。寿岳（1979）は、越後に見られる「チイ」と書かれた名前（実際には「チエ」を指す）などもその例と考えられるとしている。

表 2　カタカナを含む名前（沖縄）

生年	名前
1935	つる子
1937	
1939	
1941	つる子
1943	かおる
1945	まり子
1947	あさ子
1949	すが子
1951	きよみ
1953	
1955	よね子
1957	
1959	さなえ
1961	いくよ、かおる、なを美
1963	あやの、かたり、きみえ、きみ子、すが子、みどり、みゆき
1965	たか子、つぐみ、のえみ、ひとみ
1967	かおり、ひろみ、よしえ
1969	
1971	ひろえ
1973	
1975	あさの、かおり、さおり、まり、めぐみ、ゆかり
1977	かおり
1979	めぐみ、わかな
1981	さやか
1983	さやか、ともみ
1985	えりな、なお
1986	
1988	えり、さとみ、しのぶ
1990	いつか、みこと、めい
1992	あや、かおり、こころ

表 3　ひらがなを含む名前（沖縄）

生年	名前
1935	チヨ、ツル、ツル子、トミ子、マサ子
1937	キヨ子、ツル、フミ、ヨシ、
1939	スミ子
1941	マサ子
1943	ヨシ
1945	
1947	タケ子、トシ子
1949	サヨ子、ハツ子
1951	
1953	スエ子
1955	
1957	
1959	
1961	
1963	
1965	
1967	イツ子
1969	
1971	
1973	
1975	
1977	
1979	
1981	
1983	エリ
1985	
1986	
1988	
1990	サキ
1992	

表4　カタカナを含む名前（秋田）

生年	名前
1935	アイ、アイ子、アキ、アキヱ、アキノ、アツ、イサ、イサ子、イソ、イネ、イネ子、イヨ、エミ子、カズ子、カチ、キイ子、キヱ、キエ、キク、キサ、キツヨ、キヌ、キノ、キミ、キミヱ、キミ子、キヨ、キン、クミ子、サキ、サダ、サダ子、サツ、シゲ、シゲ子、シズ子、シヅヱ、スミ、スミエ、セイ子、セツ、セツ子、タエ、タエ子、タカ、タカ子、タケ、タチ、タツ、タミ、チエ、チエノ、チヤ、チヤ子、チヨ、チヨ子、ツエ、ツネ子、ツマ、ツヤ、ツヨ、ツヤ子、テイ、テイ子、テツ、テツエ、テツ子、トクヱ、トシ、トミ、トミ子、ノブ、ハチヱ、ハナ、ハマ子、ハル子、ハルノ、ヒサ、ヒサ子、ヒデ子、ヒナ、フヱ子、フキ、フサ、フヂ、フミ、,フミノ、マチヱ、マツ子、ミヱ、ミキ、ミチヱ、ミツ、ミツ子、ミヒメ、ミヨ、ミヨ子、ミワ、ミワ子、ヤス、ムラ、ヤエ、ユリ、ヨウ子、ヨシ、ヨシヱ、リエ、リヨ、リツ子、レイ
1937	アサ、アツ、アヤ子、イツ、イマ、イヨ、ウメ、ウラ、エツ子、カズ子、カチ子、カツ子、カネ、キヱ、キエ、キヱ子、キサ、キサ子、キミ、キミ子、キヤ、キヨ、クニ、クニ子、クミ、ケシ子、サダ、サチ、サツ、サツ子、シズエ、シズ子、シメ、スエ子、スミ、スミエ、スミ子、スラ、セイ子、セツ、タカ、タカ子、タキエ、タキ子、タケ、タケ子、タダ子、タツ、タツエ、タツ子、チヱ、チエ、チヤ、ツナ子、ツメ、ツヨ、テイ、テイ子、テミ子、トシ、トシ子、トミ、トラ、ナチ子、ナツヨ、ノブ、ハル、ヒサ、ヒデ子、フミ子、フヨ、マサ子、マツ、マリ子、ミエ、ミキ子、ミサ、ミサ子、ミナ、ミネ、ミヨ、ミヨ子、ミツ、ミヤ子、ムツ子、ユキヱ、ユミ、ユリ、ヨ子、ヨシ、ヨシヱ、ライ子、ラエ、ラエ子、リヱ、リ子、リツ、ルミ子
1939	アイ、アヱ、アヤ子、イマ、イワ、エイ子、エミ、カヨ、カヨ子、キヱ、キエ、キミ、キヨ、キョウ、コマ、サチ、サツ、サヨ子、シゲ、シホ、スミ子、セイ子、セツ、タイ、タエ子、タカ、タケ、タツ子、タマ、チヱ、チギ、チヤ、チヨ、ツルヱ、テイ、テツ、テル、トキ、トキ子、トシ、トシ子、トミ、トヨ子、ナツミ、ハナ、ハナ子、ハルヨ、ヒサ、ヒサヱ、ヒサ子、ヒロ子、フサ、フミ、フヨ、マサ、ミサ、ミサヱ、ミサホ、ミツ、ミヤ、ミヤ子、ミヨ、モト、ヤエ、ヤエ子、ヨシ子、リイ子、リツ子、レイ、レイ子、ワカ
1941	アイ、アヤ子、イサ子、イチ子、イツ、イネ子、イヨ子、エコ、ヱツ、エツ、エミ子、カシ子、カヅ子、カヨ子、キイ、キネ子、キミ子、キヨ、クニ子、サダ子、サツ子、シゲ子、シミヱ、シン、シン子、スミ子、セイ子、セツ、セツ子、タカ子、タケ子、タツ子、タミ子、チヤ子、チヨ子、ツサ、ツヂ子、ツマ子、ツヤ、テツ子、トキ、トキヱ、トキエ、トシ、トシ子、トミ、トミ子、トヨ、ナツ、ノブ、ノリ、ハナ、ヒサ、ヒサ子、ヒロ、フサ、フミ、フユキ、マリ子、ミエ子、ミサ、ミチ、ミチ子、ミツ子、ミネ、ミネ子、ミヤ、ミヨ、ミヨ子、ミワ、ヤエノ、ヤシエ、ヤス、ヤス子、ユキヱ、ユリ、ユリ子、ヨシヱ、ヨネ、リ子、リツ、レイ子
1943	アツ子、イイ子、イツ子、イナ子、イネ、イネ子、イヨ子、イワ子、エミ、ヱミ子、カズ子、カヅ子、カナ子、キヌ子、キミ、キヤ、サエ子、サチ子、サツ、サツ子、サヨ、シュヱ子、スメ、セイ子、セキ、セツ子、タカ子、タミ、チヱ、チタ子、チヤ、チヤ子、ツイ子、ツエ、ツタ子、ツヤ子、テイ、テイ子、テツ子、トク子、トシ、トシ子、トミヱ、トミ子、トヨ、ノヱ、ハル、ハル子、ヒデ、ヒデ子、ヒロ子、フキ子、フサ子、マキ子、マサ子、マス子、マツ子、ミヱ、ミヱ子、ミサ、ミサ子、ユキ、ユキ子、ユリ、ヨシ子、レイ子、レツ子
1945	アイ子、アツ子、アヤ子、イマ、ウメ、エサ子、エミ子、カヨ子、キエ子、キオ子、キミ、キミ子、キヨ子、クニ子、ケイ、ケイ子、コウ、サエ子、サダ子、サツ、スエ子、スナ、スミ、スミ子、セイ子、セツ子、タイ、タエ子、タカ子、タケ子、チナ、チヨヱ、テツ、テツ子、トキ、トシ、トシ子、ヒサ、ヒデ子、フサエ、フジ子、フミ子、マス子、ミキ、ミサ、ミチ子、ミツ、ミヤ、ヤス、ヤス子、ヨウ子、ヨ子、ヨシ子、リサ、リミ子、リヨ子、リン
1947	アキ子、イエ子、イサ子、イヨ子、カク子、カズ子、キス子、キヌ子、キミ、キヤ、キヨ子、キワ子、ケイ子、サツ子、サヨ子、スエ、スミ、セツ子、タカ子、タキ子、タヘ子、タマ、チエ、チエ子、チヤ、チヤ子、テイ子、テル子、トシ子、トミ子、トモ子、トヨ、ノマ、ハヨ子、ヒサ子、ヒロ子、フキ、フヂエ、フミ、ミエ、ミエ子、ミキ子、ミツエ、ミツ子、ミヤ子、ミヨ、ヤエ子、ヤス子、ユキ子、ユリ、リツ子、リノ、レツ子
1949	アツ子、アヤ子、イサ子、イツ子、イマ子、ウメ子、エツ子、カズ子、キエ子、キミエ、キヤ子、クニ、サツ子、スエ子、スマ、セイ子、セツ、セツ子、タエ、タエ子、タツ子、タマ子、チヨ子、テツ子、トキ、トキ子、トシ子、ナミ子、ヒロ子、フキ子、フミ子、マサ子、ミエ子、ミキ子、ミチ子、ミツ子、ミヨ、ヤエ、ヤエ子、ユキ子、ユミ子、ヨネ、ラン子、リヨ子、リン子
1951	イセ、カツ子、サキ子、タカ、タズ子、チヨ子、ツル子、テイ、テル、トシ子、ノリ子、ミネ子、ミヤ子、ムツ子、ヤス子、ユキ子、リウ子、リツ、ルミ子、レイ子
1953	アイ子、サツ子、サヨ子、スミ子、タキ子、タミ、チヤ子、テツ子、トヨ子、ナカ子、ノリ子、ミエ子、ミキ子、ミサオ、ライ子、ルリ子
1955	アツ子、カツ子、テイ子、テル子、フミ子
1957	イツ子、トヨ子、トキ子、ミサ子
1959	エミ子、コト子、スミ子、フヂ子、フミ子、ルミ子、 ルリ子
1961	ユミ子
1963	サツ子
1965	ユカリ
1967	エミ子、ルミ子、ヨウ子
1969	サキ子、カナ子、チエミ、ルミ子
1971	マキ子
1973	
1975	
1977	ヒロ子
1979	
1981	
1983	ルミ子
1985	
1986	マリ、リベカ
1988	
1990	
1992	

表5　ひらがなを含む名前（秋田）

生年	名前
1935	みゑ、みどり、よし子
1937	いね、とみ子、ひで、みき子、みよ、よしえ、りつ、るい、れつ子
1939	うた子、ちえ子、よう子、よしえ
1941	かづ子、みい子、みね、みほ
1943	きみ、たち子、れつ子
1945	よし子
1947	あや子、いく子、いま子、えさ、えつ子、えみ子、きみ子、さち子、しょさ子、せい子、たま子、とむ子、のぶ、のり子、ひとみ、みさ子、みどり、みつ子、みえ子、むつ子、れい子、りう子、れん子
1949	あつ子、いね子、えい子、かず子、きさ子、こう、すな子、たつ子、ちや、てい子、とき子、とみ子、とも子、のり子、ひろ子、ふく子、ふさ、ふさ子、まさ子、まり子、みえ、みどり、みね子、むつ子、ゆき子、より子、るり子、わか子
1951	あき子、あつ子、いく子、いち子、いつ子、かほる、きえ子、きさ子、けい子、こう子、さち子、せい子、せつ子、たず子、たち子、たつ子、たみ子、てい子、とみ子、のり子、ひな子、ふさ子、ふみ子、まり子、みさ子、みどり、ゆり子、よし子、るい子、れい子、わか子
1953	あけみ、あつ子、あや子、いさ子、いね子、かよ、くみ子、けい子、すみ子、たみ子、ちはる、ちよ、つい子、つえ、つや子、てる子、とし子、はま子、ひさ子、ふみ子、まき子、みさ子、みち子、みよ子、もも代、ゆみ子、ゆり子、よし子、りえ子、りゅう子、れつ子
1955	あい子、あや子、いく子、さだ子、たか子、てる子、とみ子、とも子、ひとみ、ふみ子、まゆみ、まり子、みち子、みつ子、みどり、みな子、みゆき、ゆり子、よし子、らえ子、りつ子、りる子、るみ子
1957	いく子、かおる、きみ子、くみ子、しげ子、たみ子、ちか子、とも子、なみ子、ひとみ、まき子、まゆみ、まり子、みどり、みよ子、めい子、ゆか子、よし子、りよ子、るみ子、るり子
1959	あい子、あつ子、あけみ、かおる、きよ子、とく子、なおみ、なを子、はるみ、ひろ子、ひろみ、ふみ子、まき子、まるみ、みどり、らん子、るみ子、るり子
1961	あけみ、いそ子、かすみ、かやの、きみ子、ひとみ、ひろみ、まさ子、ますみ、まゆみ、みゆき、やす子、るい子、るみ子
1963	あや子、きぬ子、さつき、さとみ、ちづ子、ともみ、なほみ、ひろ子、みどり、みゆき、るり子
1965	さとみ、しず子、のぶ子、ひとみ、まゆみ、みゆき、やよい、るり子
1967	くるみ、さゆり、なを子、ひとみ、みち子、みゆき、りつ子
1969	かすみ、こずえ、さつき、みゆき、やよい、ゆかり、よう子、るり子、るみ子
1971	しのぶ、たまき、ひとみ、まき子、めぐみ、るみ子
1973	さとみ、しのぶ、ちづる、ひとみ、みどり、めぐみ、ゆかり、るり子
1975	かすみ、ひとみ、まゆ子
1977	かなえ、さつき、ひとみ、ふく子、まもり、みどり、みゆき、めぐみ
1979	かおり、みどり
1981	
1983	ひなた
1985	えり子、かなえ、ちあき、みなみ
1986	あゆみ、かおり、さつき、さやか、つくし、ひとみ、まゆみ、みどり
1988	あゆみ、さなえ、さやか、しおり、ちひろ、みどり、めぐみ
1990	あゆ美、いづみ、かおり、ちさと、ちづる、ちなみ、なおみ、なつき、なつみ、ひとみ、まどか、みどり、みなみ、めぐみ、ゆい
1992	なな、まどか、みずき、みずほ、ゆかり、ゆり

５．女性の名前の変遷の地域差

３.１と３.２で示した資料から収集した沖縄と秋田の女性の名前のデータを、以下の観点で集計した。

(1) カタカナを含む名前　　例）キヨ、トミ子、ヤス江など

(2) ひらがなを含む名前　　例）ゆき、つる子、よし美など

(3)「子」がつく名前　　例）つる子、トミ子、清子など

(4) その他の名前　　例）明美、舞、陽菜など

図３は、集計結果をグラフ化したものである（各年の数値の内訳は、原稿の末尾に表６、７として付す）。

以下では、３.３で取り上げた先行研究の調査結果と今回の調査結果により、本土の中の中央と地方、そして沖縄の命名の変遷の違いを考えていきたい。

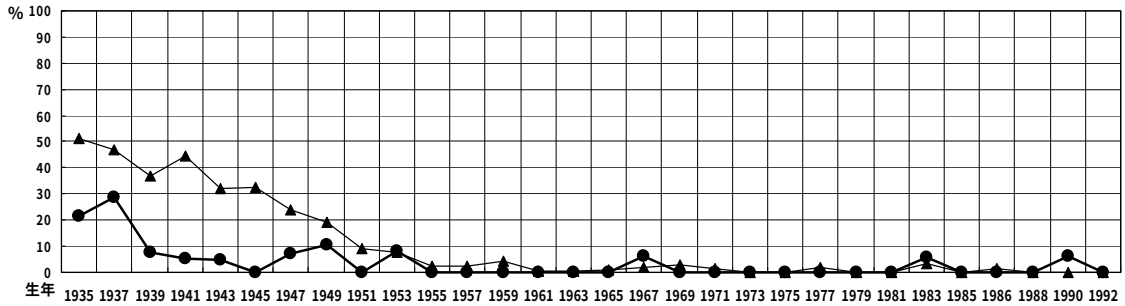


図3-1　カタカナを含む名前の変遷

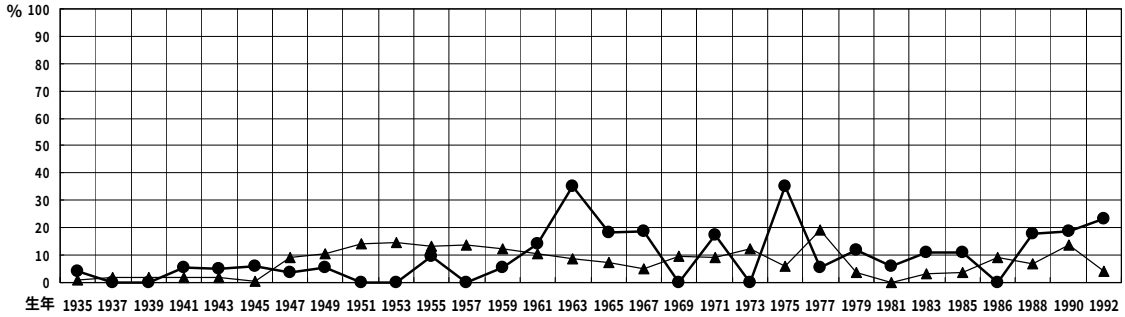


図3-2　ひらがなを含む名前の変遷

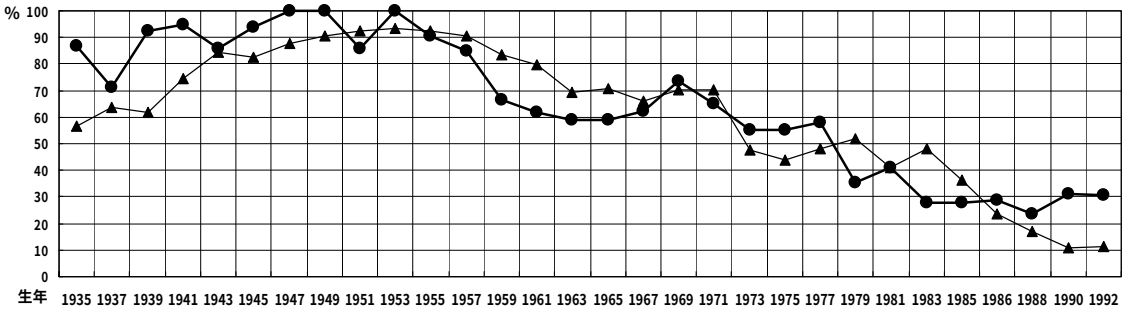


図3-3　「子」がつく名前の変遷

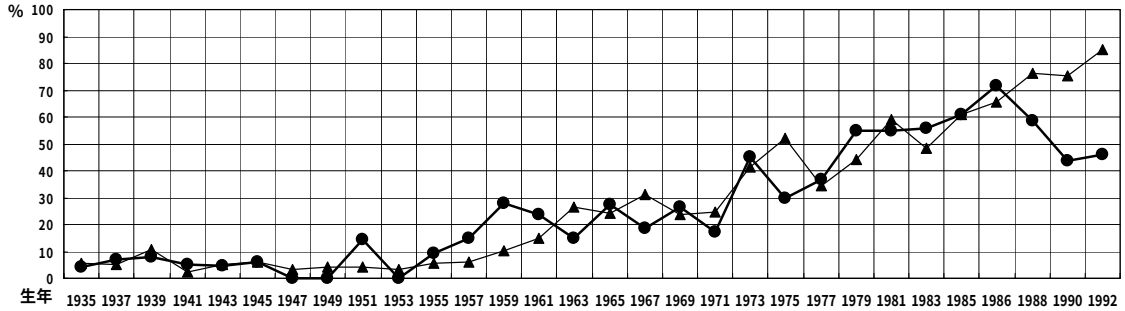


図3-4　その他の名前の変遷

図3　沖縄と秋田の女性の名前の変遷

沖縄も本土と同様、カタカナやひらがなの名前から、漢字を取り入れたことでバリエーション豊かな名前に変化した。そして、本土の名前に見られる「子」を使用するようになった。

本土における「子」のつく名前の地域的な変遷について、寿岳・樺島（1958）は、東京が京都にややおくれて始まり、その次に滋賀兵庫が続くとしている（図２参照）。一方、秋田では、大正６（1917）年頃から「子」の使用が開始され、昭和３（1928）年頃に「子」の使用が浸透していたと考えられる。沖縄に関しては、今回収集したデータから「子」の使用がいつ頃から始まったのかを調べることができなかった。ただし『沖縄タイムス』のデータから、沖縄では昭和元（1926）年頃、すでに「子」の使用が浸透していたと考えられる。

以上のことから、「子」の使用が浸透した順は京都・東京→沖縄→滋賀・兵庫・秋田と考えられる。一体なぜ本土の「地方」と呼ばれる地域よりも早く沖縄に浸透したのだろうか。これには沖縄の置かれた社会状況の変化が関係していると考えられる。明治５（1872）年から明治 12（1879）年にかけて、琉球王国が滅亡し日本に併合されるという事態が生じた。その後、沖縄では日本への同化政策として「方言廃止」や「標準語励行運動」が展開され、沖縄の持つ地域的特色は徹底的に排除された。さらに沖縄県（1996）によれば、「生活改善運動と称して改姓改名運動も展開された」ということである。つまり明治時代、日本に併合された沖縄は日本本土に同化することを強制され、自らのアイデンティティーの象徴である名前までも本土に同化させるよう強いられたのだ。方言や文化は徹底的に弾圧され、沖縄は社会的に変化を促進させる必要が生じた。そこでこの時代、東京や京都などといった本土の中央では「子」の使用が増加傾向にあったため、沖縄の人々が「子」のつく名前を本土的なものと解釈して取り入れたのだろうと考えられる。そしてその一方、滋賀・兵庫・秋田といった本土の地方と呼ばれる地域は、沖縄のように社会的に変化を促進させる必要がなかったため、沖縄ほど早い時期に「子」が浸透しなかったのだといえる。

また、寿岳・樺島（1958）は、「漢字名を採用する人がかな名を採用する人より○○コ型をよく採用する傾向があった」（寿岳・樺島 1958:20）と述べている。要するに、「子」と漢字は一つのセットとして捉えられていたというのである。しかし秋田のデータを見ると、古い時代、カタカナ＋「子」や、ひらがな＋「子」の名前が多く、その数が一定数維持し続けられていたことが読み取れる。つまり、秋田の場合は「子」と漢字が一つのセットという認識がなされていなかったのである。現在の日本には「日本文化圏」なるものが確立し、沖縄も含めて日本列島全体が平準化している。そのため文化の認識に地域的な差は感じられない。しかし、この時代はまだ沖縄は異なる文化圏にあり、また、本土を覆う「日本文化圏」も確立していなかったと言える。当時、東京（江戸）周辺には「江戸文化圏」、京都（上方）周辺には「上方文化圏」が存在し、それぞれの文化圏内で「中央」対「周辺」の序列関係が存在していたと考えられる。滋賀や兵庫は、京都を中心とした「上方文化圏」の周辺部にあったため、そこに住む人々は「子」が上流階級の人のみに許される特権的なもので、漢字とセットで使用されるものだと理解していたに相違ない。一方、秋田は「上方文化圏」（中央文化圏）の裾野には位置していなかったため、漢字の使用と「子」の使用の両方にステータスを

感じることはなかったのだろう。そのため、秋田に「子」が導入されるときに、「中央では最近、「子」を名前につけるのが主流らしい」という秋田が持つ「フィルター」を通して、変容した形で取り入れられたのではないかと考える。そこで秋田の人々は、今まで自分達が使用していたカタカナやひらがな表記の名前に「子」をつけて使用し始めたのだといえる。つまり同じ「地方」であっても、東京や京都といった「中央」の直接の影響下にあり、その価値観を共有していた地域と、そうした「中央」の影響の外側にあった地域の間に、「子」に対する認識の違いが生じていたと考える。

この点では、沖縄も秋田に類似している。沖縄も秋田と同様に、本土の「中央」と価値観を共有しておらず、沖縄の「フィルター」を通して「子」を取り入れ、まずは「子」を元から存在したカタカナ・ひらがな表記の名前につけたと考えられる。例えば、表２、３に「つる子／ツル子」「トミ子」といった名前が見られるが、「ツル」は２.２で述べた通り沖縄の伝統的な名前であるし、「トミ」も沖縄県出身の有名人に平良トミさんがいらっしゃるように、沖縄では古くから存在する名前だと考えられる。

また、沖縄では「特に親しい者、恋人を呼ぶときには、接尾語として「～小（グワー）」というふうに「小」の字を入れることはある。「ツル小」と書いて「チルグワー」、「カマド小」と書いて「カマドウグワー」という具合である。この「小」というのは決して小さいという意味ではなく、かわいらしいという程度の意味で、「～ちゃん」というほどのものであった」（寿岳 1979:134）とされており、沖縄では本土から「子」を取り入れたとき「小」の代用として捉えた可能性もあるのではないかと考えられる。

図３-３を見ると、浸透する時期に差はあったものの、やがて沖縄と秋田の「子」の使用率は同様に推移し始め、1950 年代にピークを迎え、その後緩やかに減少していくことがわかる。1970 年代半ば以降は急激に下降するが、この時期日本にはアメリカ文化が登場し、日本の文化が古臭いものとみなされるようになった。目新しいアメリカ文化に比べると、周囲に存在するありふれた日本文化は魅力のないものと捉えられていたのかもしれない。また皆が「子」のつく名前を持つようになった結果、「子」の持つ希少価値が下がってしまった。以上の理由から、女性の名前に「子」を使用しなくなったのではないかと考える。こうして「子」は確実に衰退していった。

阪倉・寿岳・樺島（1960）は、「地方では昭和になって漢字の名前も〇〇子型の名前の急激にふえて、都会に追いついていき、現在では（本土内において：筆者注）都会と地方との名前に差があるとしても、わずかなものだと思われます」（阪倉・寿岳・樺島 1960:28）と述べている。以上のことから 1960 年以降、日本本土全体が平準化し、日本が一つとなり、「日本文化圏」が誕生したと言える。したがって、1960 年以降については、秋田を本土の代表として扱い、分析を行うこととする。

それではここで先ほどの「子」の話に戻る。図３-３を見ると、秋田（本土）と沖縄では1988年以降、「子」の使用傾向に大きな差が生じているということが読み取れる。秋田（本土）が約 10%の使用率、そして沖縄が約 30%の使用率をそれぞれ維持し続けている。維持しているということは、それぞれの地域である一定数の人が日本の伝

統を感じさせる「子」のつく名前を好んで子供に命名していて、その人々の割合が徐々に減少しているということのあらわれである。しかし、沖縄の「子」の使用率は秋田（本土）に比べて３倍もの多さである。他のグラフを見ても、1988 年以降、秋田（本土）と沖縄の名前の変遷に違いがあることが読み取れる。

「子」のつく名前が減少した本土でどのような名前が増加したのかというと、昨今よく目にする当て字風の名前である。これは図３-４に示されるその他の名前に分類される。秋田（本土）では増加する一方、沖縄ではそれほど増加が見られない。一昔前であればその他の名前に見られるのは「明美」や「恵理」といった名前で、そういった名前は沖縄も本土的な名前として受容してきたと考えられる。しかし昨今見られる当て字風の名前は、読みがカタカナ表記で表されるような外来語風のもので、欧米や西洋を連想させる。本土ではこういった名前が、新しく魅力的なものとして人気を得て急速に取り入れられている。その一方、沖縄は米軍との関わり合いから、そのような名前に対してさほど魅力を感じないのではないだろうか。そして、本土ではすでに消滅してしまった「「子」のつく名前は本土的な名前だ」という認識が未だに存在し続けているのだと考える。このように、沖縄には本土とは異なる文化的な背景が存在するため、奇抜な当て字名前の導入が促進されず、「子」のつく名前が高い割合で維持されているものと思われる。

６．おわりに

以上により、言語変化が早い地域と遅い地域が存在するということがわかった。変化が遅い地域というのは、変化の促進されている地域と同じ文化圏に属していないため同じ価値観を持たず、そのため変化が遅くなるといえる。女性の名前の変遷をたどることで、秋田が「中央」の価値観を共有していなかった時期を知ることができた。また、沖縄が本土に同化したように見えながら、現在本土で進行中の「脱日本」的な価値観の共有という点では、一線を画しているという実態が明らかになった。

今後は 1992 年以降に誕生した女性の名前の変遷をたどり、沖縄の本土化の動向をさらに追及していきたいと考える。また同時に、今回取り上げなかった男性の名前についても着目していきたい。

謝辞

沖縄でのデータ収集では、那覇市立城西小学校のご厚意により、卒業台帳の該当部分を転記させていただいた。仲地末子校長先生をはじめ諸先生方、職員のみなさんには、転記を許可していただいたのみならず、作業中にも温かい励ましをいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

朝岡康二（1993）『ものと人間の文化史 72・鍋・釜（なべ・かま）』法政大学出版局
上野和男（1999）「名前と社会をめぐる基本的諸問題」上野和男・森謙二（編）『名前と社会：名づけの家族史（シリーズ比較家族/比較家族学会監修；第２期３）』早稲田大学出版
沖縄県（編）（1996）『沖縄　苦難の現代史』岩波書店
元老院（編）（1878）『纂輯御系図』松成堂

国史大辞典編集委員会（編）（1984）『国史大辞典５』古川弘文館
阪倉篤義・寿岳章子・樺島忠夫（1960）『現代のことば』三一書房
秀英舎（編）（1893）『群書類従第四輯』秀英舎
寿岳章子・樺島忠夫（1958）「女のなまえ」計量国語学会（編）『計量国語学』７　計量国語学会
寿岳章子（1979）『日本人の名前』大修館書店
東京書籍株式会社社史編集委員会（編）（1959）『教科書の変遷―東京書籍五十年の歩み―』東京書籍株式会社
保阪正康（2002）『皇后四代―明治から平成までー』中公新書ラクレ
本田明子（2005）「赤ちゃんの名付け～ネーミングの諸相～」『日本語学』24-12

参考ウェブサイト

明治安田生命「生まれ年別の名前調査」http://www.meijiyasuda.co.jp/profile/etc/ranking/
文部科学省「学制百年史　第一編　第二章　第三節　二」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198101_2_058.html

資料

合川北小学校百二十周年記念誌編集委員会（1994）『合川北小学校百二十周年記念誌』合川北小学校百二十周年記念事業実行委員会
『秋田魁新報』（1985 年６月、1986 年６月、1988 年６月、1990 年６月、1992 年６月）
『沖縄タイムス』（1966 年６月、1976 年６月、1986 年６月）
十文字第一小学校創立百周年記念事業実行委員会(編)（1978）『十文字第一小学校百年誌』
千畑村立千屋小学校創立百周年記念事業実行委員会(編)（1980）『まひる・千屋小学校創立百周年記念誌』
鷹巣町立南小学校(編)（1980）『鷹巣町立南小学校百二十周年記念誌　百二十年の歩み』
西成瀬小学校閉校記念事業実行委員会(編)（2002）『西成瀬小学校閉校記念誌　一音を一語を』
皆瀬村立生保内小学校閉校記念事業実行委員会(編)（1994）『生保内小学校閉校記念誌　おぼない』
八塩小学校創立 10 周年記念事業実行委員会(編)（1992）『東由利町立八塩小学校創立 10 周年記念誌　八塩』

表６　沖縄の女性の名前の変遷　(那覇市立城西小学校)

生年	全体数	カタカナを含む	ひらがなを含む	「子」がつく	その他
1935	23	5	1	20	1
1937	14	4	0	10	1
1939	13	1	0	12	1
1941	19	1	1	18	1
1943	21	1	1	18	1
1945	17	0	1	16	1
1947	28	2	1	28	0
1949	19	2	1	19	0
1951	21	0	0	18	3
1953	12	1	0	12	0
1955	21	0	2	19	2
1957	20	0	0	17	3
1959	18	0	1	12	5
1961	21	0	3	13	5
1963	20	0	7	12	3
1965	22	0	4	13	6
1967	16	1	3	10	3
1969	19	0	0	14	5
1971	23	0	4	15	4
1973	20	0	0	11	9
1975	20	0	7	11	6
1977	19	0	1	11	7
1979	17	0	2	6	9
1981	17	0	1	7	9
1983	18	1	2	5	10
1985	18	0	2	5	11
1986	14	0	0	4	10
1988	17	0	3	4	10
1990	16	1	3	5	7
1992	13	0	3	4	6
計	556	20	54	369	71

表7　秋田の女性の名前の変遷

表7-1　カタカナを含む名前

生年	西成瀬	合川北	鷹巣町立南	生保内	千屋	十文字	八塩	魁新報	計
1935	12	21	17	3	62	25			140
1937	1	20	9	2	69	21			122
1939	5	9	8	5	36	17			80
1941	14	20	9	4	48	14			109
1943	6	10	12	3	32	12			75
1945	2	9	4	1	33	16			65
1947	2	6	6	2	30	11			57
1949	6	5	4	2	25	11			53
1951	4	4	4	1	4	5			22
1953	2	2	0	1	5	7			17
1955	0	0	0	0	2	3			5
1957	1	0	1	0	1	1			4
1959	1	0	2	0	0	4			7
1961	0	0	0	0	0	1			1
1963	0	0	1	0	0	0			1
1965	0	0	0	0	0	1			1
1967	0	0	0	0	0	3			3
1969	0	0	1	1	0	1	1		4
1971	0	0	0	0	0		1		1
1973	0	0	0	0	0		0		0
1975	0	0	0	0			0		0
1977	0	0	0	0			1		1
1979	0	0	0	0			0		0
1981	0	0	0	0			0		0
1983	0	0	1						1
1985	0	0	0					0	0
1986	0	0						2	2
1988	0							0	0
1990	0							0	0
1992	0							0	0
計	56	106	79	25	347	153	3	2	771

表7-2　ひらがなを含む名前

生年	西成瀬	合川北	鷹巣町立南	生保内	千屋	十文字	八塩	魁新報	計
1935	1	1	0	0	0	1			3
1937	1	0	0	0	0	4			5
1939	2	0	0	0	1	1			4
1941	0	1	0	0	3	0			4
1943	1	0	0	0	0	3			4
1945	0	0	0	0	1	0			1
1947	0	1	4	0	8	9			22
1949	1	9	5	2	9	3			29
1951	4	5	0	6	15	4			34
1953	3	3	4	5	17	1			33
1955	2	4	1	2	13	4			26
1957	2	2	4	0	14	3			25
1959	1	1	3	1	10	4			20
1961	1	0	5	2	7	0			15
1963	2	1	2	1	3	3			12
1965	1	0	1	0	5	2			9
1967	1	0	3	0	1	4			9
1969	0	1	1	0	5	6	1		14
1971	2	0	1	1	3		0		7
1973	0	1	2	0	7		0		10
1975	0	1	2	0			0		3
1977	0	3	3	1			3		10
1979	1	1	0	0			0		2
1981	0	0	0	0			0		0
1983	0	0	1						1
1985	0	0	0					4	4
1986	0	0						11	11
1988	0							7	7
1990	0							18	18
1992	0							5	5
計	26	35	42	21	122	52	4	45	347

表7-3 「子」がつく名前

生年	西成瀬	合川北	鷹巣町立南	生保内	千屋	十文字	八塩	魁新報	計
1935	6	1	0	0	6	2			15
1936	3	2	1	0	6	1			13
1939	1	2	2	0	11	7			23
1941	1	1	1	0	2	1			6
1943	1	2	1	0	6	2			12
1945	2	1	1	2	5	1			12
1947	2	0	0	0	4	2			8
1949	1	0	1	0	6	4			12
1951	0	2	0	0	4	4			10
1953	1	0	1	0	4	1			7
1955	1	1	0	0	6	3			11
1957	0	0	2	0	6	3			11
1959	0	0	4	0	9	4			17
1961	1	1	6	0	5	9			22
1963	2	2	5	2	18	7			36
1965	0	1	0	0	15	14			30
1967	4	0	7	0	17	26			54
1969	3	0	2	1	17	9	3		35
1971	1	2	3	0	11		2		19
1973	5	2	5	0	17		4		33
1975	2	7	12	0			5		26
1977	2	9	4	1			2		18
1979	5	4	7	2			5		23
1981	4	6	8	0			8		26
1983	4	2	8						14
1985	4	5	8					50	67
1986	6	7						67	80
1988	4							76	80
1990	3							95	98
1992	2							105	107
計	71	60	89	8	175	100	29	393	925

表7-4 その他の名前

生年	西成瀬	合川北	鷹巣町立南	生保内	千屋	十文字	八塩	魁新報	計
1935	19	15	15	1	52	52			154
1937	24	10	10	1	66	55			166
1939	19	8	10	1	43	53			134
1941	32	26	12	0	66	47			183
1943	34	20	12	5	60	66			197
1945	10	16	16	4	64	55			165
1947	10	26	18	11	83	63			211
1949	30	27	15	7	81	90			250
1951	24	31	22	12	65	66			220
1953	20	24	25	11	64	64			208
1955	15	20	11	10	65	63			184
1957	16	18	26	2	50	54			166
1959	11	16	27	1	32	52			139
1961	8	11	15	3	37	42			116
1963	8	11	9	1	24	42			95
1965	8	9	7	0	22	41			87
1967	4	8	10	2	26	64			114
1969	2	7	12	3	25	43	11		103
1971	7	13	8	3	13		10		54
1973	4	3	6	0	17		8		38
1975	5	5	5	2			5		22
1977	7	5	8	0			5		25
1979	2	14	5	0			6		27
1981	4	5	5	1			3		18
1983	4	3	7						14
1985	4	4	6					26	40
1986	1	3						25	29
1988	0							18	18
1990	2							12	14
1992	0						48	14	14
計	334	299	322	81	955	1012	96	95	3205